

第1問 次の文章を読んで、後の問い（問1～5）に答えよ。（配点30点）

今は昔、あてなる男の、いみじうすきすきしかりけるが、よろづの所の、心細げにあはれなるを、見歩きけるなかに、小さき家のあやしげなるが、さすがに内などしたたかに造りて **あたり** 人有けり。煙も立たず、さびしげなる事限りなし。「いかなる人ぞ」と、辺りの人に問ひければ、「さる尼の候ふが、物食ふ事も知らず、心細げにて、この年ごろ候ふ也」と言ふを聞きて、

A 朝夕に煙も立たぬ壺屋には、露の命もなにかくらんと言ふを聞きて、この尼、

B 玉光る女籠めたる壺屋には露の命も消えぬなりけりといふ。

あやしくて、よく問ひ聞きければ、めでたく、光りかかやく女を隠し据ゑたるなりけり。尋ね出だして、ひとめにして、めでたくてあらせけるとかや。

〔古本説話集〕による

（注）壺屋……物置のような場所。狭苦しい家を指す。

問1 傍線部1をわかりやすく現代語訳せよ。

問2 二重傍線部①③の文脈上の意味として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ。

① あはれなる

ア 情趣のある イ 愛しい ウ 悲哀のある エ 感動する

② めでたく

ア 喜ばしいことに イ 疑わしいことに ウ お人好しなことに エ 期待外れなことに

③ ひとめにして

ア 一望して イ 一人前にして ウ 人の妻にして エ 人の目を気にして

問3 **あたり**を適当な活用形に直せ。

問4 A・Bの歌について、以下の問いに答えよ。

(1) 傍線部2「露」が持つ文脈上のイメージについて、「露のように」に入る言葉として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 丸い イ 湿っぽい ウ 美しい エ はかない

(2) A・Bの歌のやりとりの説明について最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア Aは男が詠んだ歌で、こんなに狭苦しい家で何を支えにしているのか、と尋ねている。

イ Bは男が詠んだ歌で、美しい娘を大切に育てているので生きていられる、と返している。

ウ Aは尼が詠んだ歌で、美しい娘を大切に育てているので生きていられる、と返している。

エ Bは尼が詠んだ歌で、こんなに狭苦しい家で何を支えにしているのか、と尋ねている。

問5

次の文章は、本文と共通するモチーフについて語られている『源氏物語』「帚木」の一節の現代語訳である。そこに記されている女性像について、空欄 X Y に入る言葉を、本文中から抜き出して記せ。

そんな人がいるとは誰にも知られず、寂しく荒れ果てたような草が生い茂った X Y に、意外にも愛らしげな Y が引き籠もっている、というようなことがあったら、それこそこれ以上すばらしく感じられることはないだろう。どうしてまたこんな所にと予想外なだけになぜか心がひきつけられるものだ。

このページは空白です。

第2問 次の文章を読んで、後の問い（問1～8）に答えよ。（配点40点）

そもそも、よい絵とはなんであろうか。すぐれた美術作品とはどんなものであろうか。

答えは簡単で、見る人の心を動かすものにほかならない。哀しみでも憎しみでも喜びでも怒りでもかまわない。ポジティブな感情でもネガティブなものでもかまわない。見る人の気持ちが変わらないうらぐらと揺り動かされる。いても立ってもいられなくなる。一枚の絵がなぜだか頭からずっと離れない。それが、¹芸術が作品として成り立つ根源的な条件なのである。

芸術が生み出すこうした現象を、私たちはしばしば「感動」などとひとくくりにしてわかったつもりになってしまふ。これがよくない。その意味では芸術にとって「感動」は諸悪の根源だ。

感動などと言って済ませようとした瞬間に、あの苦労物語がここぞとばかり首をもたげってくる。この絵を描くのに、画家がどれだけ血のじむ努力をしたことか。どれだけ多くの人が関わり、^{はらん}波瀾万丈の道程があったことか。などなど。

こうなってくると、無理矢理にでも感動しなければいけない気持ちにもなってくる。感動しなければ、自分が罪深いようにさえ思えてくる。一致団結して感動を支えるべきだ。そのためには、もっともっと勉強しなければならない。努力して感性をみがかなければならない。

正直言って、そういうのはつかれます。

ここには、「芸術に感動できる者はすぐれた感性の持ち主であり、A 作品に込められた高い技芸や複雑な歴史を読み解くすぐれた感性を持つ」という偏見が横たわっている。

なぜ偏見かと言うと、作る側だけでなく見る側にとっても、知識や技術は鑑賞の助けにはなっても、それがあからといって本当に心が動かされるとは限らないからだ。むしろ、それが邪魔になって目の前の絵に感性が届かない、ということだって起きてくる。

最近、やたらオーディオ・ガイドとやらが発達して、美術館に行くと、みなヘッドフォンを掛けて絵を見ている。²あれはいい、本当に絵を見ていることになるのか。肝心の絵のほうに、解説を聞くためのイラスト風情に成り下がってはいはしないか。あんな

ものを付けて絵を見せられるなら、B 何も考えずじっと絵を睨みつけたほうがずっといい。

そうでなくても、芸術をめぐって感動の源泉を知識や技術にもとめようとする、どうしてもわかりやすい基準に頼りがちだ。「うまい」「きれいだ」「こちよい」などがそれである。うまい絵、きれいな絵、こちよい絵ほど、パッと見に判断しやすく、みなで価値を共有できるものはない。

実は、岡本太郎が真っ向から否定したものが、この三つの基準であった。「芸術はうまくあつてはならない、きれいであつてはならない、こちよくあつてはならない」と太郎は喝破した。

要は、ある絵を見て、「うわ、なんてみにくい絵なんだろう」「こういう絵はもう二度と見たくない」「こんな絵を描いた人物は、きっとどこか変なのだ」といった反応をすることを、芸術は排除するべきではない。世間的にはネガティブだとされるこうした感情も、もしかするとその人の心の奥底に眠り、ずっと押さえつけられていたなにかに気づき、それを解放するきっかけになるかもしれないからだ。

そして、どんな絵に心が揺さぶられるかは、結局のところ、その人にしかわからない。誰にもわかってもらえない。ましてや共有などできるはずがない。感性がみがないというのは、煎じ詰めればそういうことだ。

つまり、芸術における感性とは、あくまで見る側の心の自由にある。決して、高められるような代物ではない。その代わり、貶められることもない。その人がその人であるということ、それだけが感性の根拠だからだ。

ひとたび⁴これをまちがえると、感性の根拠が自分のなかではなく、作られた作品や、それを作った作者の側にあるように思い込んでしまう。しかし、芸術体験にとってこれほど不幸なことはない。

他人のことは決してわからない。ましてや他人の感性などわかるはずがない。結局、芸術作品は自分で見るしかない。それは誰も肩代わりができない、あなただけの体験だ。言い換えれば、X のが芸術だ。そして、これがすべてなのである。(中略)

芸術作品には芸術作品の「分際」というものがある。最終的には、あなたの生き様に何もおよぼさないのであれば、どんなに価値

が高いとされている芸術でも、ほんとうのところは粗大ゴミも同然なのだ。

別の言い方をすると、芸術家にとって、見る者の感性の優位には残酷なところがある。作り手が、自作の価値の源泉をできあいの知識や履歴に頼れなくなったとき、作家は丸裸にされてしまうからだ。

職業柄、よく美術館やギャラリーを訪れるのだが、見事な技を持ち、様々な歴史的な文脈を踏まえ、まるで一個の構造物のようによく練られた作品に出会うことは少なくない。しかし、それでいてまったく心を動かされないのだ。

こういう作品には、なにか無惨なものがある。よくできていて、しかも同時に無惨なのだ。いや、よくできているということ自体が、無惨なのかもしれない。つまり、知識や技の痕跡は垣間見えても、直接、感性を呼び覚ます力がない。学習の対象にはなっても、絵を見ることの喜びや哀しみがでない。怒りや晴れやかさがでない。

反対に、そうした知識や技に裏付けられることがなく、まったく教育を受けたことのない者が引いた素描の線に、猛烈に心を動かされることがある。C、そこで描かれた線が、とくになにかすぐれているわけではない。

ここで勘違いしてしまうと、そんな線を引いた者の無垢や天才を賞賛するという別の悪弊に陥ってしまう。安易に子供の描く絵はみなすばらしいと言ってみたり、障害をおった者の絵を格別に賛美したりしてしまう。本当は、感性を通じて自分の心のなかを覗き込んでいるだけなのに、そのことに気づかない。気づこうとしない。

結局、怖いからだろう。

誰でも、自分の心の中身を知るのは怖い。だからふだんはそっと仕舞っておく。けれども、ときに芸術作品はこの蓋を容赦なく開けてしまう。ゴツゴツとした感触がある。なにか軋轢が生じる。自分が壊れそうになる。こうした生の手触りを感じるとき、私たちは、自分のなかで感性が音を立てて蠢いているのを初めて知る。

6 感性とは、どこまでも事後的にしか知れないものだからだ。

(榎木野衣『感性は感動しない——美術の見方、批評の作法』による)

問 4

傍線部3「岡本太郎が真つ向から否定したもののこそ、この三つの基準であった」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア うまくて、きれいで、ここちよい芸術はわかりやすく、みなで価値を共有できるが、高い技芸を求める美術界では評価されないから。

イ 万人にわかりやすい価値をもっている芸術では、人の心の奥底に眠っているものに気づかせ、それを解放させることができないから。

ウ 世間的にネガティブだとされる評価も、みなでその価値を共有すればポジティブな評価になりえるが、感情そのものは解放されないから。

エ みにくい絵を排除するべきではないが、ある程度、みなで価値を共有できないと、絵に心を揺さぶられる体験ができなくなってしまうから。

問 5

傍線部4「これ」の示す内容を、六〇字以内で説明せよ（句読点や記号なども含む）。

問 6

空欄 に入る言葉として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 一つの絵の価値をみんなで共有できる

イ 自らの体験を消去して無心で鑑賞できる

ウ 他人の感性を否定して独自に体験できる

エ 個が全責任を負って見ることができる

問7

傍線部5「よくできていてということ自体が、無惨なのかもしれない」のはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 喜びや哀しみを直接見るものに訴えかけることはできても、作り手に技術や知識といった裏打ちがないから。
- イ 見事な技術を持ち、歴史的な知識に裏打ちされた作品であっても、見るものの感性を呼び覚ます力がないから。
- ウ 一個の構造物のようによく練られた歴史的な作品であればあるほど、細かいミスが逆に際立ってくるから。
- エ 鑑賞する知識や技術が見る側にないことによって、喜怒哀楽といった感情を感じ取ることができないから。

問8

次の文章は、傍線部6「感性とは、どこまでも事後的にしか知れないものだからだ」を説明したものである。空欄①・②に入る言葉を、本文中から抜き出して記せ。

芸術作品は、ふだん見ないようになっている ① の中身を覗き込ませ、見る人を揺さぶるものである。こうした芸術作品の触感を感じることで初めて、自分のなかで ② が蠢いていることを知ることができる。

第3問

次の問い（問1～4）に答えよ。（配点30点）

問1

次の①～⑤の傍線部のカタカナを漢字に改めよ（楷書でていねいに書くこと）。

- ① 平仮名を漢字にへんかんする
- ② 楽なシセイで話を聞く
- ③ エンカツな人間関係
- ④ 状況をしっかりとハアクする
- ⑤ キョウイ的な記録を残す

問2

次の①～④の四字熟語を完成させるには、にどの言葉を入れるのが最も適切か。次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ。

- ① 五里 （物事の様子や手掛かりがつかめず、方針や見込みが立たず困ること）
ア 霧中 イ 途中 ウ 意中 エ 最中 オ 集中
- ② 同音（多くの人がみな同じことを言うこと）
ア 対句 イ 異人 ウ 言語 エ 同意 オ 異口
- ③ 優柔 （物事の判断がなかなかできず、迷ってばかりいること）
ア 英断 イ 剛健 ウ 手段 エ 不断 オ 遠慮
- ④ 鬼没（前触れもなく突然現れたり、急に消えたりすること）
ア 仏生 イ 自在 ウ 神出 エ 不意 オ 散見

問3

次の①～③の意味に合致することわざを、次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ。

① 他人には重要な問題でも自分には何の関係もないこと。

ア 住めば都

イ 枯れ木も山のにぎわい

ウ 月夜に提灯ちようちん

エ 対岸の火事

② 包み隠していた悪いことが発覚すること。

ア 猫をかぶる

イ 馬脚を現す

ウ 生き馬の目を抜く

エ 狐につままれる

③ 思いがけない幸運が舞い込むこと。

ア 仏の顔も三度

イ 朱に交われば赤くなる

ウ 人のふんどしで相撲を取る

エ 棚からぼた餅

問4 次の①～③について、反対の意味を持つ熟語を、次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ。

① 豊富

ア 欠陥 イ 無欠 ウ 欠乏 エ 欠員 オ 補欠

② 革新

ア 保守 イ 保管 ウ 確保 エ 保障 オ 保険

③ 単一

ア 複雑 イ 複眼 ウ 複線 エ 重複 オ 複合